

【学位論文審査の要旨】

本論文は、精神科デイケア（以下、デイケア）において退院直後や初参加のデイケア利用者が慣れない集団の中で緊張や不安を感じたり、目標や集団価値を共有できず中断することが多い中で、不適応な状態にあるデイケア利用者の評価や援助を的確に行うツールとしての質問紙開発に関する研究である。

デイケアは退院後の利用者が社会に適応する際に、保護的な入院環境からの急激な変化を緩和し、安心できる場の提供という役割とともに症状の再燃・再入院の予防にも貢献する地域精神医療の重要な心理社会的サービスの一つとして、いわば入院から地域への橋渡しとしての役割を担っている。そうしたデイケアにおいて、とくに新しいデイケア利用者が不安緊張を感じるデイケア開始初期の様子を把握し、対応することは実際に運営するスタッフにとって不可欠であり、デイケア利用者の生活安定に寄与する可能性のある先駆的な論文といえる。

研究者は、研究プロセスの前段として、精神科デイケア「初期適応質問紙」の原案作成（169 項目）や援助方略などによる検討を行い、その後、デイケア施設専門職（以下、専門職）や実際の利用者らとのコンセンサス過程を通して、同臨床試用版（41 項目）を作成し、さらに 159 名の利用者に協力を得て項目分析を行い、弁別的妥当性を検討することで、「精神科デイケア初期適応質問紙臨床版 23 項目」（以下、臨床版 23 項目）を作成した。臨床版 23 項目は 5 件法の自記式質問紙であり、デイケアでの利用者の状態をできる限り分かりやすい項目表現とすることで、簡便に回答できるよう工夫した。臨床版 23 項目は、その合計得点などで適応状態を評価することが可能であり、それぞれの項目結果を具体的に尋ねることで専門職と利用者が結果を共有できるコミュニケーションツールとしても用いることができる形式となった。

臨床版 23 項目を用いて、さらに 12 施設 249 名の参加協力を得て探索的因子分析による構成概念妥当性の検討、「状態・特性不安評価（STAI）」を外的基準とした基準関連妥当性の検討、そして因子ごとの α 係数による信頼性の検討を行った。因子分析を行う中で 16 項目 3 因子構造（第Ⅰ因子：場への適応感、第Ⅱ因子：プログラムへの期待感、第Ⅲ因子：相談関係作りの会話）をもつ「精神科デイケア適応質問紙 16 項目」（Psychiatric Day-care Adaptation Questionnaire, 以下 PDAQ-16）に改変された。PDAQ-16 を用いてデイケア利用 20 日以内の群とそれ以降の群を比較検討した結果、20 日以内の群が PDAQ-16 総計で有意に低かった一方で、STAI には有意差が認められず、本質問紙は初期や不適応な状態にある利用者の評価に活用できるとした。

本研究目的は先行研究の十分な検討の上で明確であり、妥当な研究方法が用いられ、結果の解釈も公平かつ真摯に行われている。研究内容には精神科デイケアの領域において新規性があり、作業療法学の発展に寄与するものと考えられる。

最終試験においては、精神科デイケアは、就労や次のステップに向けた中間施設であ

り、初期だからこそ本質問紙を用いて脱落を防止する意義があるが、継続することそのものが目的ではないという本質問紙の適用を適切に理解していることが質疑において確認された。また、本質問紙は、高齢者や、認知症の人に用いる場合、評価の目的や意義が異なってくることも適切に理解しており、臨床における適切な運用に関して一定の理解が得られていると判断された。今後、この質問紙が用いられる際には、こうした点を開発者としてしっかり伝えていくことの必要性も理解していることが確認できた。以上のように、本研究の限界や改善すべき点について熟慮された考えや具体的な解決方法を述べるなど、適切かつ真摯な対応がなされ、今後の研究課題としての展開についても意欲的な発言が認められた。

以上のことから、本研究の趣旨および内容、そして質疑のやり取りを総合的に判断し、本研究が博士論文に値すること、著者が博士の学位（作業療法学）に相当すると判断した。